

ニーチェ 研究 序 説

古 賀 保 夫

ニーチェの文は読む人を陶酔させる。自己満足の感情を噴出させる。それはしぶきのように心を襲い、ベートーベンのピアノ曲「ハンマークラヴィーア」のハンマーの適確な音のように耳朶を打つ。だが、その波打つ文章の背後に、私は人間も時間も忘れ果てた孤影の姿を感じる。その魅力ある激しい口調と堅牢な文体は珠玉の如く光る。しかし正体は容易に掴めない。それでも不安、疎外の意識に訴える波動力がある。だから小市民、革新的な青年、労働者、失意にうめく人などの全階層に共通な心理に呼びかければ、受け入れ易い響きをかなでる。

在来の思想を否定して問題を提起するニーチェの哲学は革新的な姿をとる。またそのニヒリズムは混迷の中に光を求める人に対し輝やかなしい未来さえ感じさせる。

ある個所では空虚、ついでそれを超えた深遠なニーチェの思想は *Gott ist tod* (神は死んだ) として、*Übermensch* (超人) という、いかにもドイツ的な人間を創り、ツァラトゥストラに *Wille zur Macht* (権力への意志) を吐露させる。そのディオニュソスの肯定 (*Ja-Sagen*) には生が自己自身を支配する大きな調べを持つ。

ニーチェの思想は、いま実存主義の先駆と見なされている。ハイデッカー、ヤスパーズ、カフカ、サルトル、トーマス・マンに圧倒的な影響を与えたニーチェは、いま死後70年にして、新しい陽光を浴び甦えろうとしている。しかし、私は異常なまでに美しいニーチェの文体に、そしてまたほとぼしる詩の抑揚と渦巻ける生に対し「いま一度」と叫ぶ勇猛心に囚われそうな気を捨て、彼の思想を見つめたい。

1

近世哲学を学派別に見るならば、ニーチェはステュルナー、キルケゴール、イブセン、クロポトキンとともに個人主義の範疇に入る。

ニーチェは1844年、牧師の子として生まれ *Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik*（音楽の精神から悲劇の誕生—1972年）発表以来、1889年麻痺症にかかるまで15年間にわたり、多数の著書を出したが、人間ニーチェを考察するに当って、まず彼を生んだ当時のドイツの情勢を一見してみることにする。

ニーチェ誕生前後のプロシヤは、すでにオーストリーを除く以外の大部分のドイツ諸邦を包括する勢力となっていた。そして統一ドイツを作ろうとする意は強く、1848年統一憲法制定のためにフランクフルトに国民議会を召集した。これは挫折の憂目にあったが、1861年、プロシヤではウィルヘルムⅠ世が即位し翌年ビスマルクを宰相に起用して歴史的な鉄血政策を押し進めた。この新局面展開の下、デンマークとの戦いに勝利を取め、これをドイツ連盟の外に排除、隣邦諸邦に呼びかけて1866年北ドイツ連盟（*Norddeutscher Bund*）を作った。時にニーチェ22歳。

北ドイツ連盟はそれ自身が國家たる性質をもち、後年の帝國としての諸制度を具えていた。1870年ナポレオンⅢ世と戦い大勝、ついでバーデン（*Baden*）、ヘッセン（*Hessen*）、バイエルン（*Bayern*）、ウエルテンベルク（*Württemberg*）も連盟に参加、プロシヤ王ウイルヘルムⅠ世は皇帝（*Deutscher Kaiser*）となり、1871年ドイツ（*Deutsches Reich*）は名実ともに成立した。ビスマルクはオーストリー（1878年）、イタリア（1883年）と三国同盟を結び、1888年、ウイルヘルムⅡ世即位した。

ニーチェは、このドイツ建設発展期に幼年、青年期を送るが、ニーチェによればビスマルク時代は比較的「偉大な時代」だとされた。これはビスマルクが精神的であったからに他なるまい。

さて1850年代のドイツは、1848年の革命によるブルジョア的改革を転機として綿工業、鉄鋼業を中心に多数の企業が設立され産業資本の段階が形成された。連合國家により代表されていた大地主ブルジョアと資本家はそ

の富と教養により貴族を圧倒するに至った。「教養ある」ドイツは過去のものとなり、手工業的小経営は大企業に移行した。

貴族的個人主義の立場に立つニーチェが他と類を異にする超人の理想を唱え君主道徳を提唱し、民衆を徹底的に憎悪し「主人道徳」と「奴隷道徳」を対概念とした思考世界の現実的社会的背景はここにあった。プロシヤは官僚的軍事国家への道を急ぎ文化的には空白な成り上り根性の人間を生みつつあった。

「父方も母方も昔から代々ルター派の牧師という家系に生まれたニーチェは……自分自身は貴族の出ではないにも拘わらず、家庭環境から、どんな頑固な貴族も顔負けするような保守的で傲慢な人間になった」(F. ハルガルテン著「独裁者」—反革命独裁と疑似革命独裁)「空威張りのプロイセン・ユンカーはその頃ビスマルクに率いられていたが、彼らにギリシヤの都市貴族たちの崇高な洗練された理想を吹き込み、それによって民主主義を敗北させるという案は荒唐無稽も甚だしいことであった」(同)が、ニーチェはワグナーと同じく解体しつつある封建世界に強い共感をもっていた。

中産階級の自由主義、合理主義、ブルジョア倫理に反対するニーチェを取り巻く社会環境と、貴族主義の権化だったニーチェを対比するとき、資本主義的発展下のドイツは、軟弱なキリスト教的市民社会とさえ彼には思えたのだ。そしてギリシヤにこそ人類の黄金時代があると考え、産業資本下の企業意識に奴隷の意識を見、また民主主義には人間性を欠如したモラルしかないと判断した。

しかし時計の針は逆には回らなかった。ギリシヤを指向し、ギリシヤ悲劇にディオニュソス的混乱が内在すると観じ、ソクラテスの合理主義を排し「悲劇の誕生」の因を合理主義によるとしたニーチェは現実世界と断絶せざるを得なくなったのである。

現実的には存在し得ないものに可能性を信ずれば、結局は幻を画く。意志形成の場で自律性を失った者にとってはカリスマ的指導者が救世主と映るのも、これと同じ人間心理である。

「悲劇の誕生」発表後のドイツは農業国から資本主義への発展過程をたどっていた。なにしろイギリスではすでに1770年ごろから始まっていた産業資本主義をドイツが経験したのは1848年すぎだから、資本主義に遅れた国であった。資本の原始的畜積は少なく、ドイツ商人の力は弱かった。

1848年全プロシヤには僅か136の木綿製造所しかなかったし、法律、関税率、交易制度を異にした多くの小国が存在し、封建制、農奴制の廃止は他国より遅れ、イギリス、オランダ、フランスにおけるような進歩した銀行組織もなかった。

それが1871年のドイツ帝国成立前後から重工業における機械の発明と、その応用による第二産業革命を経て自由競争の原理による資本主義全盛時代となった。これが1890年以後独占的傾向をもつ金融資本主義時代に移行したのは周知のとおりである。

この産業革命に始まる資本主義の飛躍的發展、ことに1871年普仏戦争に勝利を得てからはドイツ統一が進み、またアルサス・ローレンスを手中にし償金50億フランの流入がドイツ資本を活気づけた。その結果生まれたものが火薬の臭いをもつ官僚的軍事国家であり、そのドイツの状況がニーチェの貴族意識に適する筈はなかった。存在と意識はバラバラになったのだ。しかもニーチェはその懐く貴族主義を捨てず、ギリシヤに心を指向した。ニーチェの心情、思想は当時の流動的上昇過程にあった政治経済発展の未来を展望せず、「主人道徳」と「奴隷道徳」のみを追求した。この両道徳の対概念は、文化の区別、対立であり、価値体系の区別である。

「農奴」の価値体系に対応するのは「主人道徳」でギリシヤにあり、一方「奴隷道徳」に対応するのは「平等」の価値体系で、これは近代民主主義ヨーロッパにおいて典型的にあらわれた。ニーチェはギリシヤにのみ眼を向けた。彼の道徳概念では社会の発展につれ変化する人間意識を的確に把握することは不可能であった。余りに貴族主義、個人主義でありすぎたのだ。

ニーチェによれば高級なタイプの間人は、低級なタイプの間人とはすでに生物学的に異なっている。指導する人間と指導される人間とは別物であ

る。しかも上から見た善悪(主人道徳), 下から見た奴隷道徳の判断はただ高級な型の間が行なう。そして奴隷視する人間を痛みつけても何ら罪悪感を生じない。ナチスはこの人間観を政治的に利用し「決定はただ一人が行なう」(ヒトラー「わが闘争」)という意志の路線にニーチェの思想を乗せ人工地獄を作ることができたのである。

2

ニーチェの主要著作からその思想の発展過程をたどると「音楽の精神からの悲劇の誕生」(Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik—1872)は、ショーペンハウアーの哲学に基づき、ギリシャ悲劇を説いている。そこでニーチェはアポロ的とされてきたギリシャ文化にディオニュソスの側面を発見して、これを文化創造の源泉としている。「反時代的考察」(Unzeitgemäße Betrachtungen—1873~76)では神学者シュトラウスを教養ある俗人としたワグナー、ショーペンハウアーを讃え「人間的、余りに人間的な」(Menschliches, Allzumenschliches—1878~80)で新しい人間を創造、「曙光」(Morgenröte—1881)では因襲的道徳を批判、そうしてこの道徳には超越した「超人」(Übermensch)の姿の兆しを思わせ、「よろこばしき知識」(Die fröhliche Wissenschaft—1882)にも超人を予知させている。

これが「ツァラトゥストラはこう語った」(Also sprach Zarathustra—1883~85)に発展、さらに「善悪の彼岸」(Jenseits von Gut und Böse—1886)でキリスト教的道徳を「奴隷の道徳」として激しく非難攻撃している。ここでニーチェは善悪の彼岸に立った支配者、つまり英雄の道徳を発見し、「あらゆる道徳の価値転換の基礎」を見ている。ついで従来真理を偶像にすぎぬと否定し、価値転換を打ち出したものが「偶像のたそがれ」(Götzedämmerung—1888)で、さらに「アンチ・クリスト」(Der Antichrist—1888)となり、「この人を見よ」(Ecce Homo—1888)で自己の体験を叙述、「権力への意志」(Der Wille zur Macht—1901)となった。この哲学において「ニーチェは人間の魂をニヒリズムの根底と

地盤の上で発見しようとした」（キルケゴール）のである。

さてこの一連の著書はカントやヘーゲル哲学に見る大伽藍の如き大体系を整えていない。せん光の輝きを放ちながら論理整然たる形而上学の体系をもたない。T. F. アンジュロスはニーチェのいうディオニュソスの要素を「個体を超越しようとする飛躍，全体的生への陶酔的な同調」（ドイツ文学論）としている。ニーチェはディオニュソスの要素とアポロ的要素の統一をはかった。調和と均衡，明朗と端正をもって画かれたギリシャ像はただアポロ的仮装を必要としたのにすぎぬ。その背後にディオニュソスの要素が存在すると断じた。キリスト教は古代文明の遺産とイスラム文明の遺産を奪ったと論じた。デモクラシーは「人間苦の宗教」の名の下に奴隷のモラルの勝利であり，ために人間は虚無に沈んだと叫んだ。痛烈な論断である。そうして「反時代的考察」で時代批判を試みる。このような思索のあと，真理を変える人ツァラトストラが登場する。この真理は「永劫回帰」。それは弱者には耐えられない。支配者として運命づけられた強者のみがそれを為し得る。ここには論理以前のもの，ニヒリズムの極地がある。人間の連帯はなく，暗黒の世界が肯定される。

「人間が不完全であるならそれでよいのだ！」

「私の心にかかるものは超人である。超人こそは，私の第一のもの，唯一のものである」

とツァラトストラは語る。かくてニーチェにあってはこの超人を生むことが課題となる。「神は死んだ。いまや吾らは一超人が生きることを欲するのだ」（人間的，余りに人間的な）と新人間の創造を宣する。在来のキリスト教道徳は否定されねばならぬのだ。だから「生を解放するために道徳を絶滅」したのである。「ニーチェにあっては，神が死んだ時に超人が現われるという事の中にキリスト教と人間性の内的連関が間接に現われている」「しかも宗教の代用物は永劫回帰であった」（K. レーヴィット「ニーチェ」）

ともあれニーチェは自分の頭脳の中では，あらゆる道徳から解放された。自身の立場では自己はイェスと合一と信じ，自己を「十字架にかけら

れた者」と称したのだ。キリスト教を虚偽の世界観として否定し、自らをキリストと合一した者と観じたニーチェ哲学に宗教的なものを感じざる得ない理由はここにある。しかし神を否定し、自らを神と擬するなら化学を無視して薬品を製造するのに等しい。

3

ニーチェにとってはドイツ帝国統一への進展、自由主義経済発展がもたらす物質的向上と「繁栄」こそドイツを精神的に不毛ならしめる要因であった。また普仏戦争の勝利、軍事的勝利も「敗北に変わり、ドイツ精神の死に変わることによってドイツ帝国を利した」と問わざるを得なかった。ニーチェが主張する「君主道徳」が物質的繁栄によって衰退することは「悪」であったからに他ならぬ。

この精神の衰退をドイツ的精神一つまりはギリシャディオニュソスの側面に甦生させるのは権力意志の権化たる超人にまつほかない。その過程としてまず強者になることが目的となる。キリスト教モラル—謙遜、平和、仁愛、同情—は軽蔑抹殺すべきものだ。抹殺者超人の力にまつほかない。また資本主義が生んだ人間心情である打算、妥協、偷安も「悪」(Böse)であり、これを打倒するには金毛獣 (Blonde Bestie) をもって、まず文化を破壊し、強者の歓喜に酔い野生の尊さを打ち出さねばならぬのだ。これこそ貴族的高貴であり、且つ善であり、美であり、幸福であるとした。ここに至ってニーチェははじめて生を肯定する。その肯定者は君主道徳の樹立者であった。(道徳の系譜 Zur Geneologie der Moral)

その生は永劫に地上に回帰する生 (Ewige Wiederkunft) である。永遠の成長であり、休息を知らぬ存在である。「成長するところ汝はあらん」(Werde, der du bist) であった。ゲーテは「死して生きよ！」と言っているが、ゲーテには年輪を加えて行く姿がある。固定した中心をめぐる進み方であり、受容力があつた。ニーチェは攻撃的で自己を破壊しながら進む。円環を画き永劫につながる生。そこに現世の生活におけれ幸福感と歓喜を見出す。それに至る苦悩がそのまま永劫の生活である。ツァラトゥス

トラの放つ讃歌の「然り」(Ja) は、彼の苦悩に呼びかけられた声なのだ。「有と非有が問題になったとき永劫回帰の思想が、最後のカタストロフを照らす夕陽のように、彼に輝やき出でたのである。(K. レーヴット「キュレケゴールとニーチェ」)。一切の価値を転換させようとして一切の存在の本質は他を圧倒克服し、より強大ならんとするものと規定し(権力への意志)た。

その論調は重砲の如く轟くかと思えば一転して速射砲の炸裂音を発し耳をろりする。さらには釈迦の教義にも似て人を眠りにさそう美しさがある。しかし表現の美しさは決して知識の最高形成とは言い難い。そこには「科学」の欠如がある。主体的には実在的で、空想の中では全能の人間が生まれるものの、客観的にはそうではない。この点、仏教の世界観との合致点さえ感ずる。

仏教の世界観は世間、出世間、出出世間の三様の形式から成り、世間は凡夫の世界、出世間は阿羅漢の世界、出出世間はボサツの世界で、現実の世間を出て出世間に至り、再び世間に還れのを理想としている。それを示した「般若心経」の一節にいう。

菩提薩埵の般若波羅密多に依るが故に心に罣礙なし。罣礙無きが故に恐怖あること無し。一切の顛倒夢想を遠離して究竟涅槃す。

苦悩を超え大肯定する所に相似点がある。また仏教の出発点が厭世観にあり、反人間的であるのも、ショーペンハウアーの影響を受けたニーチェの厭世観と相通ずる。ただ仏教にあっては、釈迦があくまで人間社会に帰らず乞食集団の一員として生を終わるのに対しニーチェは権力の意志を強く示す点が異なるが、反人間的という点では一致する。

ニーチェには実在の根底に支配欲、権力欲を置いた。凡庸性は人間の尺度を狂わすという考えをもっていた。弱者を軽蔑した彼は女性についても毒々しい言葉を投げかけている。

「女たち自身がすべての個人的な繁栄の背後に常になお一女というものに対して一非個人的な軽蔑を抱いている」「ワキ役を演じる本能をもたない女は男よりも野蛮である」(善悪の彼岸)と述べている。

これは女性蔑視者として有名なオットー・ワインガーが、女性を「心霊も自我もない、非天才的な、無道徳な無節操な人間」としてとらえた（性と性格）のと極めて似通っている。ともに性を異にしたその“誕生”によって事は決定しているのだ。そしてワインガーは24歳で自殺した天才であり、同時に狂的人間であった。

4

ニーチェの歴史解釈に移ろう。一口に言えば永劫回帰であり、終末なき終末である。「歴史は歴史の問題を自ら解かねばならぬ」（反時代的考察28章）と述べている。またつぎのように書きとめている。

Die historische Gerechtigkeit, selbst wenn sie wirklich und in reiner Gesinnung geübt wird, ist deshalb eine schreckliche Tugend, weil sie immer das Lebendige untergräbt und zu Falle bringt: ihr Richten ist immer ein Vernichten.

(Vom Nutzen und Nachteil der Historie)

（歴史的公正は、それが実際かつ純粹な所信の下に行なわれる場合ですら、恐るべき徳である。それは常に生けるものを掘りかえしそして倒壊させるからである。その裁判は常に破壊である）

（歴史の利害について）

この歴史解釈には当惑がある。また同じ論文では

Nur aus der höchsten Kraft der Gegenwart dürft ihr das Vergangne deuten.

（現代の最高の力からのみ君らは過去を解釈することを許される）

と述べているが、「最高の力」のみが歴史を正当に評価し得るとし、歴史は唯一者のためのものとなっている。

これをマルクスの歴史観と比べてみよう。

「人類の歴史（Geschichte der Menschheit）はいつも産業及び交換の歴史とのつながりにおいて研究されねばならないということにある。…

…そのような歴史を書くことがドイツでは不可能であること……なぜならドイツ人にはそのための理解力と資料だけではなく感性的確知(Sinnliche Gewissheit)もまた欠けているからである」(マルクス「ドイツイデオロギー」—「歴史」)

「歴史は自己を“精神の精神”(Geist vom Geist)としての“自己意識”に解消することにあるわけではない。歴史にはどの段階にも一つの物質的な成果が、生産諸力の総和が、自然への、そして個人相互のあいだの歴史的につくり出された関係が存在している」(同、「意識の生産について」)と叙述している。歴史は唯一者の恣意によって作り出されてはいない。

またヘーゲルはその歴史哲学で、意識が成熟すると既成性を乗り越える時点にいたり、意識から未来の行為が導き出される。そのとき意識は前方をも後方をも演ずる。その省察が歴史洞察である、と解明している。

ニーチェに見る難澁な歴史解釈ではない。

ニーチェにあってはヘーゲルに見る歴史の発展が感じられない。歴史は形而上学的かつ宗教的でしかない。もとよりニーチェはドイツ精神の問題性を、キリスト教文化圏を叩いたのだが、この思考方法がナチスに悪用されたのも、一指導者(Führer)ヒトラーを一超人(Übermensch)に置き換えればよかったからだ。いかにニーチェが国粹主義の狂乱に反対した人であったにせよ、また一つのヨーロッパの認識を持っていたにせよ、それが現実政治では逆用されたのは歴史の皮肉であった。

かつて G. ブランデスは「ドイツ人は総ての実際の事物に於ては尺度と限界とを愛する。思想や空想を限定すれことを甚だ嫌悪する。それ故、彫刻的形式が消滅する処に於て、即ち形而上学、叙情詩及び音楽に於て凱歌を奏している。ギリシャ人が最高度にもった造形的彫塑的才能が欠如している。」(吹田順助訳「移民文学」)と力説した。これは母国に欠けたものをニーチェがギリシャに求めたとさえ思われるが、ただブランデスが非現実的な夢を辿るドイツ観念論を痛論したことは甚だ示唆に富む。「空想を限定することを嫌悪し」永劫回帰、超人の思想に飛躍したニーチェと、

ナチスの独裁体制の現実を、ともに推量しているような辛辣さを含んでいる。

もとよりニーチェ自身はナチスが信奉したような反ユダヤ主義に対しては恐怖の念さえもった都市貴族であった。しかし「ドイツの最上層に置かれた多勢の精神神経病者たちが、潮流が違ってしまっても水面に浮かんでいようとして行なった一致協力、ニーチェ型の本当の超人の生粋の英雄主義の如く美しく装われていた」（ハルガルテン「独裁者」—反革命独裁と疑似革命独裁）のを見れば、ニーチェ哲学——アフォリズムから成る一体系（K. レーヴィット）——がナチスに利用される属性をもっていたことを証明している。

1938年、ナチスのオーストリア進駐はマキャベリズムとニーチェ主義の結婚が生んだものではなかったか。「命令することのできる人間ならば服従せずにはいない人間を見つける」と主張したニーチェの力の意志をナチスが一面的に把握し政治利用したのに他ならぬ。ニーチェが人間を、生を内部から高揚しようとして表現したのを外部に向って攻撃化し、暴力化したのではないか。ニーチェ哲学のもつ反人間性もからみ合っただけで生じた猛攻であり、倨傲と侮蔑が相乗されたのであった。

さらにニーチェの思想はイタリアにも直接的な影響を及ぼしている。1908年、ムッソリーニはニーチェ礼讃の論文を公にし、ニーチェの反自由主義的見解の大部分を採用している。このムッソリーニの論文発表に先立ち、ニーチェ死後20年のころイタリアの作家G. ダヌンチオは「戯の処女」をニーチェに捧げている。ダヌンチオは、いわばニーチェ主義の政治的役割を果たした人物であった。彼のの処生訓は「危険に生きる」にあったという。これはサディストであり、ニヒリストと違わない。超人がサディストとニヒリストに変貌している。

かかる人物の画く理想は幻であり、それを直線的に強行する暴力がその人物を一段と狂的にする。狂気をはらむ「権力への意志」が彼の全存在となり無知、野蛮が世をおおう。「理想はただ与えられた社会的条件のもとだけで実現されうる」ということの認知、この認知なくしては理想はユート

ピアに終る」（ジャリーフ「人間の哲学」）。そのためには理性を必要とする。

ところがニーチェにあっては「寛容な人は彼の理性に、理性の弱点に依存しなければならなかった」とし、人間の生にとって理性は不必要、危険、不可能とした。個人が社会的個人であることの認識は感知されない。「人間の本質は個々の個人に内在する抽象物ではない」（マルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」）という個人認識と大きな隔たりがあるが、それでもなおニーチェが一刀両断に事物を裁断するのに同調し、一種安息の場所を見出す人間は跡をたっていない。生への燃えるような情熱と妥協を排した人間に革新を感ずるからである。だが、理性欠如の人物の放つ言葉がいかにもきらびやかに見えようとも、それは反人間的な途を指すに止まる。

G. ルカーチは「ドイツ文学小史」の中でつぎのように評している。

「ニーチェは精神的分野において……世界的な規模で、この時代の反動の指導的な人物である。……現代の文化の鋭い批評家の身振りをしたニーチェ哲学のこうした特長（全哲学が革命的な革新の自負と姿勢の衣をまとい、過去及び現在との徹底的な断絶を自称していることなど）の結果として、混迷のうちに何物かを求める若いインテリゲンチヤは……かれの教義に追従する」と評し、さらに「要は彼の個人と社会に關すれ見解が民主主義の問題からそらせている」と痛論している。

5

1889年1月、イタリーのトリノの街上に倒れてからのニーチェは妄想的な狂人の生活を送り1900年ワイマールの妹の家で死去した。その間、「十字架に遭える者」とサインし「世界は絢爛者として天空は限りなく喜びに満ち」と書いた。自分自身の破滅を見つめ、しかもそれに満足しているニヒルに徹した思想である。「これが人生だ」と絶叫し自己超克をしようとした。若きころ、真赤に焼けた火箸で手を焼き克己心を試した、と伝記にはあるが、そこに狂気と隣接した心を見ると同時に超人と名乗り人の喝

業を得ようとする人間に共通した心理が感じられる。何百万という人の拍手と賛同を得て自己に潜在する精神病の発生を防ごうと躍気になる人間の姿が展開している。

「彼の超人は、超土地貴族ではあるが……ワグナーでもヒトラーでもない。しかし沈み行く階級の理想に再び生命を吹き込もうというドン・キホーテ的努力においては、ニーチェは彼らも恥じ入れほどの宣伝家、自己広告家になっていた」（ハルガルテン「独裁者」）のである。狂気を支配した人間が狂気に支配されてくる。だから「腐敗、排泄物、汚物に魅せられ幻惑される性向の代表者ヒトラーは同時に狂的なナルシズムをもっていた」（フロム「悪について」）のと同じ精神状況となっていた。

「ニーチェほど自己についての鋭い洞察をした人は空前絶後だ」と精神分析のフロイトは彼の心理を分析したあとで「道德の系譜」の良心の苛責をとりあげて「外部に向って発散できないすべての機能が内部に向けられる内面化が苛責の起源」とし、これは自由の本能 (Instinkt der Freiheit) つまり「権力への意志」(Wille zur Macht) が圧迫されて、良心の苛責と自己虐待だけが働らくとき、道德的価値としての“非利己的なもの”が生じ、ここに自己否認、自己否定、自己犠牲を伴う「快感」(Lust)が生ずると説明している。ニーチェはヨーロッパで彼が見たキリスト教文明の退廃を、自由の本能、権力への意志の抑制として捉えているのに対し、フロイトは性の抑制から眺めているところに両者の差異があるが、フロイトのニーチェ分析も、この狂信的人物の一面を捉えているといえよう。そしてニーチェは人に影響を与えはしたが、生命を生み出してはいないのではないか——との疑問をが生ずる。

「人間的、余りに人間的な」第二部の後半「漂白者とその影」は350のアフォリズムを収めている。その中の〈Et in Arcadia ego〉（私もまたそれをよく知れり）に美しいつぎの詩がある。

「英雄的に、同時に牧歌的に。このようにしてひとりひとりの人間もまた生きて来、このように自分を持続的に世界の中に感じ、また世界を自分の中に感じて来たのだ」

自然との一体感の中で人間の交わりを失ったニーチェの姿、それは自然に共鳴した孤影であったのだ。

同じギリシャにあこがれを懐いた人に J. Ch. F. ヘルダーリンがある。ヘルダーリンは人々と自然と神々とが手をつないで作る喜びに満ちた共同体を現代的に再現させようとした。ヘルダーリンではキリストの像—愛、犠牲があった。ニーチェには人と人とを結ぶ原理が欠けていた。

6

最後につきの一文をとりあげるのは、ここに私見の結論が抽出されるからである。

Wahrlich, ein Segnen ist es und kein Lästern, wenn ich lehre: „Über allen Dingen steht der Himmel Zufall, der Himmel Unschuld, der Himmel Ohngefähr, der Himmel Übermut.“

„Von Ohngefähr“—das ist der älteste Adel der Welt, den gab ich allen Dingen zurück, ich erlöste sie von der Knechtschaft unter dem Zwecke.

(Vor Sonnen-Aufgang—Also sprach Zarathustra)

まことに私が教える次のことは一つの祝福であって誹謗ではないのだ。「一切の事物の上には偶然という空、無垢という空、気まぐれという空、放恣という空があるのだ」

「気まぐれ」—これは世界最古のものである。これを私はあらゆる事物に取り戻し与えた。私はあらゆる事物を目的への隷属から救出した。

(日の出前—ツァラトゥストラはかく語った)

ニーチェによれば、偶然、無垢などは総括して考えれば自由であり、また貴族は気まぐれであるのだ。それは地に隷属しないからなのだ。

ドイツ精神界に衝撃を与えたニーチェの思想は現代文明への痛烈な問いかけであり、痛激な批判の矢であった。「問う」こと自体には意義が見出せた。問いは国家、宗教、道徳、科学、音楽、自然、人生、病氣、男性女

性、恋愛、家庭、民族、歴史的人物など多岐に亘っていた。

その問い自体が否定的なものから肯定的なものに到達することが問題であった。しかもニーチェの否定の中には肯定的根源の包括があった。その肯定、そして理想は、ひとたび過去になれば偶像化し、未来の場合は真理（Wahrheit）となった。だから歴史哲学的には無意味な歴史否定となりヘーゲルの弁証法論とは別なものとなり、万人平等観などは弱者の思想であり排撃さるべき思想でしかなかった。ニーチェの人間解釈はそこで終わった。自分だけが天上界に舞い上り、人を見下した。差別する者は逆に差別されることになった。

「これまでは貴族社会の仕事であった。これからもそうであろう。その社会は人間と人間のあいだに等級と価値の差異を示す長い段階のあれこれ信じ、何らかの形で奴隷制を要求する。生活というものの自体、本質的には専有、侵害、よそ者・弱者の証明、抑圧と苛酷なのである」（善悪の彼岸）

これは「人間の昇華」をのべたくだりだが、生活、政治、芸術、哲学においても戦争と権力こそがすべてであったニーチェにとっては、人間の昇華は民主主義に対する反対物であったのだ。人間との交渉は不要となるのだ。かくて具体的な国家観に到達することもない。これをヘーゲルの道徳論と比べるとはっきりする。ヘーゲルにあっては道徳論は法律哲学であって、抽象的法、道徳性、人倫の三項目を含み、さらに人倫には家族、市民社会、国家が含まれ、現実的な人間社会、国家が存在する。人間はここで生きた存在である。ところがニーチェにあっては人間が生活している世界は宙に浮くほかない。

いまの時代は分裂症的な自己疎外が人間の前に迫っている時である。官僚化のため個人の存在は見失われ、ますます自動機械化し疎外の進行が回転する。神でなく「人間が死んだ」時代になりはじめている。

このとき全存在の否定を激越な口調で叫ぶニーチェが再び照明を当てられるのも故なしとしない。それはヒューマニズムや理想主義はある調和をもつ一実在と見なされていたのに、それが否定されている現実を直視すれ

ばすれほど、その再否定を語る言葉に現実悪の解毒剤を見出すからであろう。

しかし市民意識も低く、デモクラシーも定着したといえ難い日本の精神構造の中に、独断的推論の多いニーチェの思想を安易に取り入れることは危険をはらんでいるといえよう。幻想は決して現実的な正しい力になり得ない。それをニーチェ自ら洩らしている言葉に求めて、小論の結びとしたい。

Der Satyrchor ist zu allererst eine Vision der dionysischen Masse, wie wiederum die Welt der Bühne eine Vision dieses Satyrchors ist: die Kraft dieser Vision ist stark genug, um gegen den Eindruck der „Realität“, gegen die rings auf den Sitzreihen gelagerten Bildungsmenschen den Blick stumpf zu machen.

(Die Geburt der Tragödie)

（サテュロイ（半人半獣の森の神）合唱隊は、もともとディオニュソスの大衆の幻想があり、さらに一方、舞台の幻想はこのサテュロイ合唱隊の幻想である。この幻想の力は「現実」の印象、つまり見物席で一隊をなしている文化人たちに対し、眼を幻惑させるほど強烈なのである）

(悲劇の誕生)

参 考 文 献

- | | |
|-----------------|--|
| K. レーヴェット | 柴田治三郎訳 「ニーチェの哲学」 岩波現代叢書
1969年 岩波書店 |
| K. ヤスパーズ | 草薙正夫訳 「ニーチェ」 1936年 創元社 |
| S. ツウィク | 神保光太郎訳 「篤実への熱情」 —フリードリヒ・ニー
チェ」 1939年 河出書房 |
| E. トレルチ | 西村貞二訳 「ドイツ精神と西欧」 1970年 筑摩書房 |
| G. W. F. ハルガルテン | 西川正雄訳 「独裁者」 1967年 岩波書店 |
| E. フロム | 鈴木重吉訳 「悪について」 1952年 紀伊国屋書店 |
| 手塚富夫 | 「ドイツ文学案内」 岩波文庫別冊 1968年 岩波書店 |
| J. F. アンジュロス | 原田義人訳 「ドイツ文学史」 文庫グセジュ 1966年
白水社 |

- G. ルカーチ 道家・小場瀬訳 「ドイツ文学小史」 1969年 岩波書店
G. ブランデス 吹田順助訳 「移民文学」 1933年 春秋社
朝永三十郎 「近世における私の自覚史」 1968年 角川書店
伊藤吉之助編 「哲学小辞典」 1950年 岩波書店
速水敬二編 「哲学年表」 1949年 岩波書店
A. シャリーフ 藤野渉訳 「人間の哲学」 1964年 岩波書店
白水社

ニーチェ諸著作

お断り 本論文の執筆については中京大学教授前川知賢氏の校閲を頂きました。